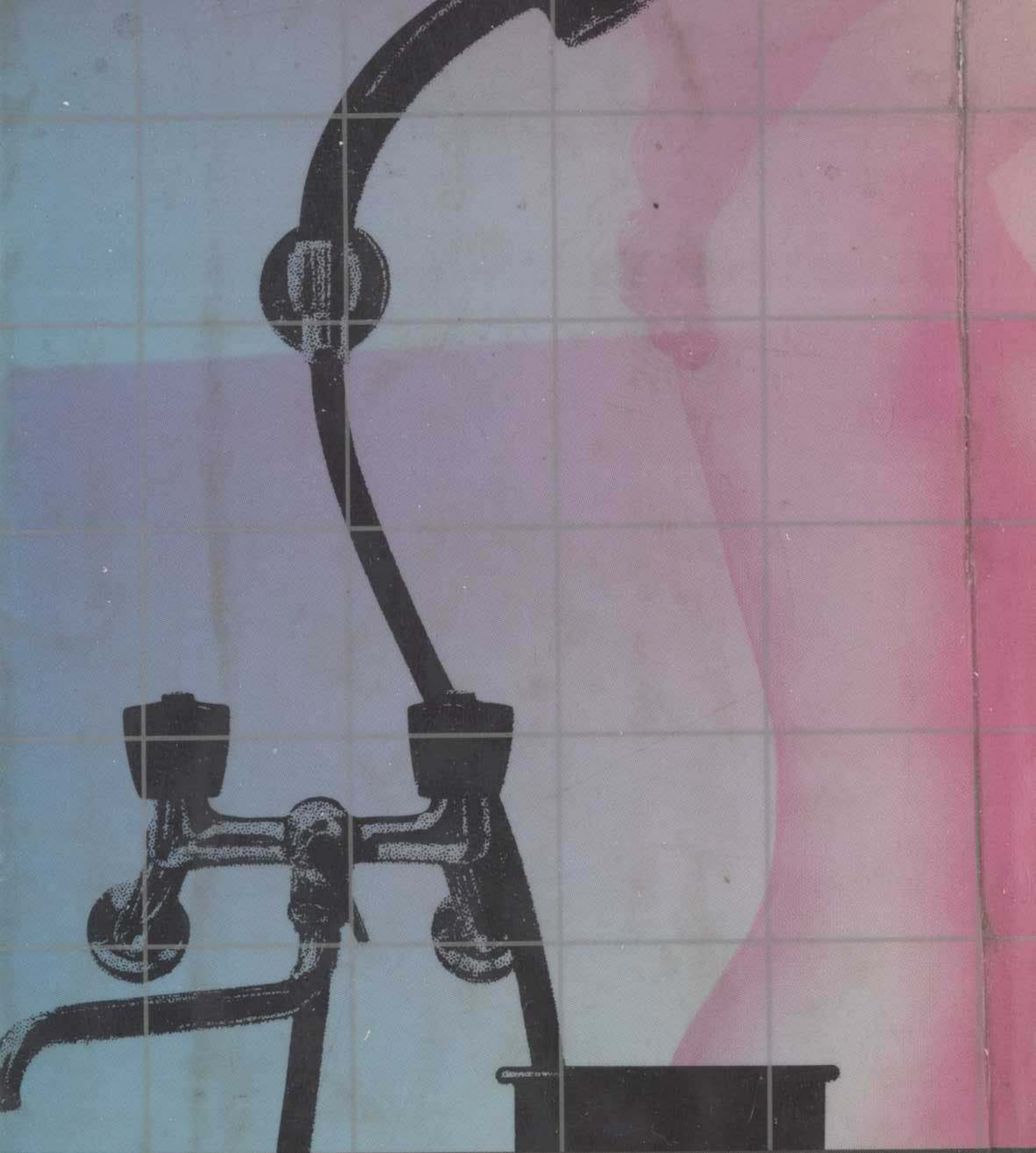


KAPPA NOVELS

長編推理小説

梅雨と西洋風呂

松本清張

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　梅雨と西洋風呂　¥600

昭和46年5月30日　初版発行

松本清張（まつもとせいちょう）
東京都杉並区高井戸東1-22-3

発行　小保方宇三郎

印刷者　内俊一
京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

株式会社 光文社
電話 東京（942）2241（代）

でお取替えいたします。　（明泉堂製本）

116613
© Seityō Matumoto 1971

(分)0-2-93(製)03042(出)2271 (0)

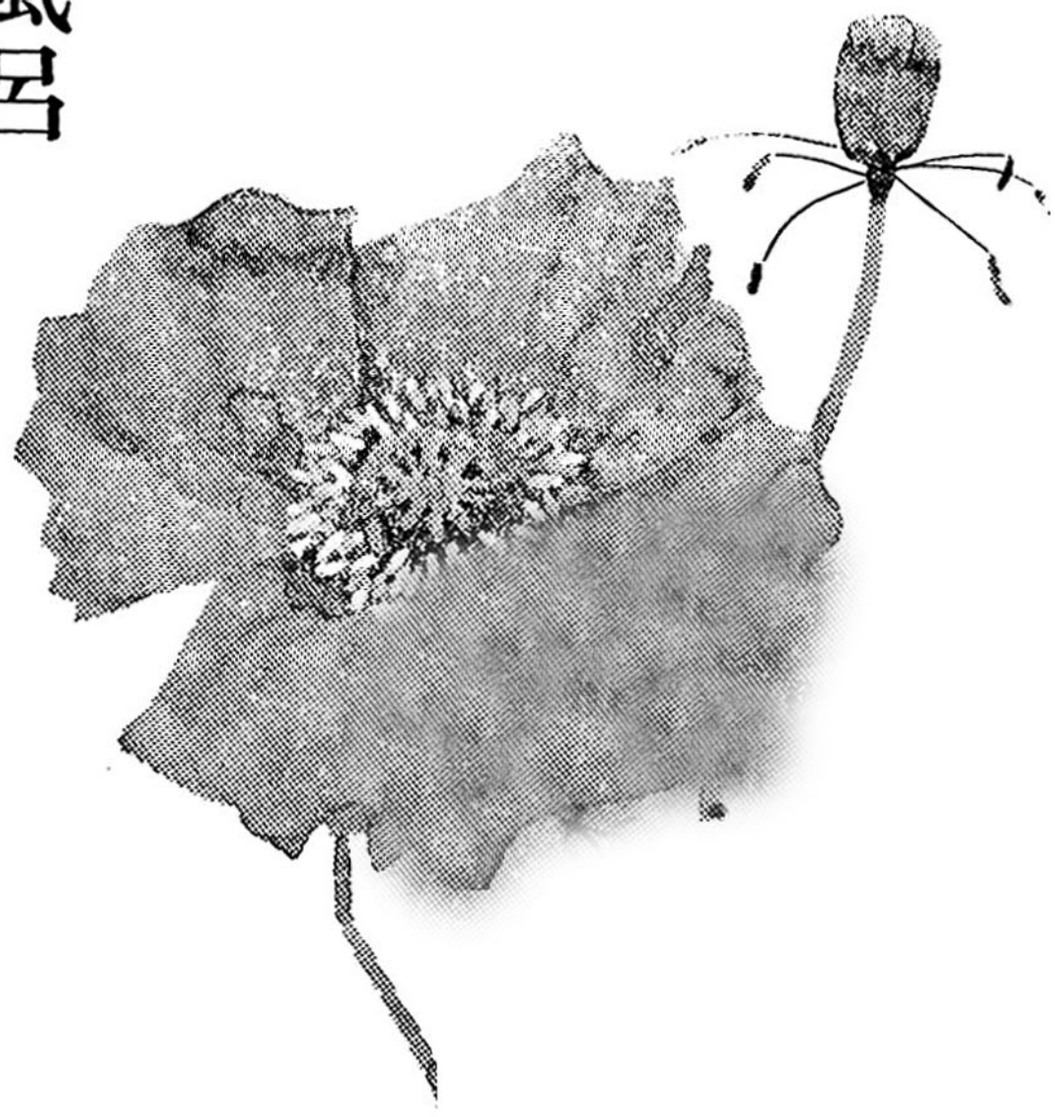
長編推理小説

梅雨と西洋風呂

松本清張

カッパ・ノベルス

梅雨と西洋風呂



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

カット　堀（ほり）　文子（ふみこ）

南側が海で、北側は山の多い県である。海に臨んだ東寄りに人口三十万という水尾市がある。県庁の所在地は山奥の盆地だが人口は二十万に足りない。水尾市が繁栄しているのは、城下町として昔から農村を控えた消費都市であること、近ごろは遠くないところに新興の工業地帯がいくつもできて、その連衡の中心になっていたからである。

鐘崎義介の家業は父祖の代からの酒醸造業だった。「寿仙」という酒は、中央でこそ知られていないが、この地方では有名である。義介は次男で、上京して私立大学にはいったころから放蕩をし、大学も一年で中退した。不良の仲間にはいったとか、左翼運動をしているとか、また暴力団まがいの右翼団体にいるとか、噂はさまざまだったが、東京での様子はよくわからなかった。

義介が水尾市に戻ったのは、兄が死んで家業を嗣ぐことになったからである。そのとき彼は東京で同棲していた女を連れ帰った。水商売関係の女という噂だったが、白粉焼けしたような黒い顔は、なるほどそうかと思われた。いったいに白粉顔で生活していた女は素人になると化粧を落とし、素顔で暮らすのが多い。背格好はすらりとしているが、器量はそれほどのことはなく、無口で、人まえに出ることを嫌った。義介が鐘崎酒造株式会社の社長になったのは、いまから二十数年前である。

義介は、兄につづいて父が死ぬと、「民知新聞」というのを創った。敗戦後の民主主義運動の

風潮に乗じた市政新聞だった。こうしてみると、義介の東京での放蕩は軟派ばかりでもなかったらしい。弁舌も筆も立つほうである。新聞は、はじめタブロイド判四ページだった。

民知新聞の方針は「不偏不党・正義に立脚し、権力と妥協せず」で、その社是に「三権主義」を掲げた。日刊でなく、週刊だった。

《市民はすべての市政について知る権利がある／市民は市政害毒から生活を守る権利がある／市民は市政に参加する権利がある》

編集部も営業部も鐘崎酒造株式会社の中に置かれた。事務所を二分し、ベニヤ板で仕切った。新しい檜板に墨書の新聞社名の看板が、木目の出た黒い板に「銘酒・寿仙」と金箔のくすんだ古い大看板とならんだ。

事務所の横裏には半分白壁の醸造場と酒蔵とが長く二棟ならんでいる。買いこんだ新聞用紙や売れなかった新聞の残りが、その酒蔵の一部に侵入した。

民知新聞はいわゆる社会ダネの報道はしない。それは県の大新聞や中央紙の地方版がやってくれる。第一、そんなニュースが目的ではない。全面が市政の裏面暴露と批判である。一面の左半分ベタにつぶして社説がある。毎回、市政に対する激しい非難が載る。市長、助役、市会の正副議長、市会議員、これと結託する市のボス、企業関係が槍玉に上がる。それには必ず「鐘崎義介」の署名がある。

新聞は面白いからかなり伸びた。弱った市長や市会議長が、金で済むことなら、と妥協を申し入れたが義介は蹴った。そして、このことを新聞で書く。

全市の料理屋から「寿仙」が締め出されたことがある。料理屋組合長は、市会議員の子分である。民知新聞は、料理屋を媒体とする市会議員と女の関係を「本社調査」としてリストにして発表すると予告した。また、使い込みで馘になった税務署の係長から取材しておもだった料理屋の脱税を発表すると予告した。「寿仙」は再び料理屋にはいるようになった。予告は「資料についてなお追跡調査中」という中間記事でそのままになった。

後になって説をなす者は、このへんから鐘崎義介はおかしくなったと推測しているが、そのへんははっきりしない。とにかく、それからも民知新聞の「市政腐敗」に対する攻撃はつづけられた。

「義介さんは、えらい道楽をはじめた」

彼を知る者や酒の取引関係者は言い合った。しかし、正面から彼に忠告する者はいない。みんな彼の強気におそれている。

現在四十七歳の鐘崎義介は痩せてはいるが、性格が激しい。うすい眉毛の下にある一重瞼の眼はらんらんと輝いている。三白眼である。顴骨と咽喉仏がとび出て、額がひろい。膂力に秀で、柔道三段だと本人は称している。東京に遊学しているとき、講道館に連日通ったという。

民知新聞の社長兼主筆の鐘崎義介は、最初、取材記者に恵まれた。近県の地方紙にも社内レッドパージの嵐が吹いて、落ちのびてきた有能な記者三、四人ぐらいが、一時の腰かけのつもりで絶えずいてくれた。やめてもすぐに代わりがくる。まだ落ちつかない世の中だった。海軍燃料廠の隠匿物資を摘発して、地方の新興財閥を窮地に陥れたのはその最たる成果であったろう。各中

央紙がこの田舎都市に記者を派遣してきたくらいだった。鐘崎義介は、こうした人たちから取材の方法、記事の書き方を伝授された。もともと勘のいい男で、すぐに器用に会得した。

それに、彼は父祖の代からの造り酒屋なので、市の顔役に知己が多い。取材となると、新聞記者とは違ったこともできる。そこで思わぬ情報がはいる。

これまで民知新聞が取り扱った事件のおもなものは中学校建築工事事件、市立病院改築問題、市庁舎増築工事事件、市営住宅建築問題、水道工事問題などがある。これらは市当局の幹部と業者との取引だが、それは表むきのことで、裏面には市会議員や市のボスの暗躍があった。というよりも、彼らが業者と結託し、市当局の幹部をひきずりこむ場合が多いのである。民知新聞はこれらの疑惑を詳細に報じる。それで、だんだん人気が出てきた。

それからおよそ二十年近くが経った。その間に鐘崎義介は市会議員に当選した。民知新聞で人気を売ったおかげで、最高点だった。もっとも「寿仙」の醸造元としても彼の名前は知られている。はじめの一期は無所属だったが、二期目からは保守政党の憲友党にはいった。この県は憲友党の勢力が圧倒的で、大臣をつとめた代議士が三人も出ている。

市会も憲友党が絶対多数で、革新系をふくめた野党は三分の一にも足りない。鐘崎はこれまで市長のほか市会議長以下の与党議員を糾弾してきたのだから、当然野党を択ぶと思われたのに憲友党にはいったから、市民は案外な思いになった。

しかし、憲友党の中にも多数派と少数派とがある。あるいは主流派と反主流派とがある。鐘崎

義介は反主流派に属して、「内部から憲友党を粛正する」と宣言した。

こうして週刊の民知新聞は相変わらず「市政の腐敗」と取り組んでいった。もちろん毎号新しい事実が出るわけではないから、前回のむし返しが多くなる。社説の主張も概念的となる。郷土史家に郷土の物語などつづきものを書かせて苦しい紙面を埋めたりした。それでも長い間やっているから部数も一万部ぐらいに固定して、まあまあの成績だった。この地方のデパート、私鉄、銀行、会社、商店などの広告掲載もふえた。

失業した本職の新聞記者が次々にやめて去ってからは、鐘崎義介はいい編集者や記者にめぐまれなかった。新聞の募集広告を見て来るのは、素人のような者が多く、ようやく仕事をおぼえたと思うころには、他にいい就職口を見つけて辞めてゆく。何しろ給料が少なかった。たまに経験者だと名乗る男を採用すると、半年も経たないうちに広告料などを着服して逃走する。もっと場なれした人間は、脅迫ダネをザラ紙の原稿に鉛筆書きして、相手をゆすりに行く。「不偏不党・正義」を社是とする民知新聞としては、こんな背徳漢を置くわけにはゆかなかった。

鐘崎義介が憲友党の市会議員でありながら、「不偏不党」も妙だが、彼の説明によると、市会議員としての彼の立場と、新聞とは別個のものだというのである。新聞はあくまでも公平であって、不正や権力を弾劾する野党的立場にあって市民の味方にならねばならぬとする。政治家としての鐘崎と、新聞とは、別個の異質なものであるという。したがって、新聞の報道も与党の批判が多い。さすがに発刊当時ほどの尖鋭さはないが、当社の存在を主張するために扇情的だったといえる。紙面が落ちついたのは、それだけ民知新聞に歴史が加わり、権威が出たということだろ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

う。しかし、なお市政批判を継続しているのは、異彩だった。市会で、市長や助役、局長など市の幹部や与党議員のだれかれとなく噛みついていく鐘崎義介は所属不明の一匹狼のようなところがあり、それでいて妙におかしみもあるから市民に人気があった。

論旨は鋭く、毒舌が得意である。議会では彼の弁舌に匹敵する議員がまことに少ない。市会議員といえば、街の呉服屋、金物屋、洋品店、土建業、電器屋、旅館の主人といった連中で、座談には長じているが、議場で、意見を述べるとか議論をするのは不得手である。市長は訥弁、市会議長はどもりである。鐘崎義介が「質問」と叫んで勢いよく立ち上がると、雛壇の当局側は色を失い、与党席の後方にいる幹部は苦り切る。鐘崎が民知新聞の記者を使い、ネタをつかんでいると思うと、彼の「質問」という一言に満場が緊張する。野党席は拍手し、傍聴席はどよめく。

しかし、与党が党規違反（統制を乱したということで）の廉で鐘崎義介を処分したり、また除名したりすることができないのは、彼には与党内の反主流派が応援しているからである。

こういえば、鐘崎義介の糾弾や批判がいつも党内主流派に向かっていることがわかる。市長も助役も主流派が支持し、議長は主流派の頭目である。副議長は反主流派から出ているが、二年にして正副議長の交代制了解を反主流派はどうしても勝ち取ることができない。

それというのが、憲友党の県連合会が主流派につながるからである。県連は党本部の主流派の翼下にある。これまで党の県選出代議士数の七割までが主流派で、反主流派からの大臣経験者は過去一名か二名にすぎなかった。

したがって、党中央、県連、市支部と勢力は縦に構成され、主流派の威勢はとうてい崩れそう

になかった。主流派の絶対優勢は鐘崎義介が反抗した程度では崩壊しない。それだけ鐘崎義介には、やりがいがある。ドン・キホーテとかピエロとか言われてからかわれながらも、主流派を攻撃する。反主流派にとっては頼もしい闘士である。

同じ与党でも反主流派には利権に関与するシェアがきわめて少ない。市の執行部——業者の中間にわり込むのは主流派だから、うま味はいつも彼らに握られる。そういうとき彼らは反主流派には秘密裏にことを運ぶ。万一、触知されたら、口どめ料ぐらいですませる。反主流派はあとで知って口惜しがるが、まさか表立って党内の攻撃もできないので、そういう際には鐘崎義介を使うと重宝である。社長の憲友党員の人格から分離した民知新聞は、機能をフルに活躍させる。

もっとも、それには限界がある。糾弾が激しすぎて憲友党が危殆に瀕するような事態までには発展しない。つまり、党利益という範囲の中で、主流派の追落としを目するのである。このことは、究極には鐘崎義介の言動を野党の利益には役立たせない結果にしている。

もう一つは、というよりは、そのために主流派への攻撃の材料を全部さらけ出すということはしない。あまり追いつめると党利益と衝突するからである。だから、いくつか重要なところは隠されていた。このことは民知新聞の《市民は知る権利がある》の社是、つまり新聞の憲法に抵触するけれども、だいたい鐘崎義介における憲友党所属議員と、民知新聞社長ないし主筆の人格の分断が完全でないから、この矛盾はやむをえない。

《敵側》からみると、鐘崎義介が何か材料を隠し持っているというのは気持ちの悪いことであった。それにだいたいの見当がついていれば、その対策の方法もあるが、推定がつかないときには

当惑する。あれかこれかと心当たりを考えて薄気味悪くなる。鐘崎義介に、しだいに強面(こわもて)の貫禄がついてきたのは、やはり長い経験による駆引きの技術に熟したのであった。

いまから三年前の秋、鐘崎義介を訪ねてきた三十二、三の小肥りの男があった。デパートの食堂のレシートの裏に「土井源造」とボールペンで書いたのを名刺代わりにさし出した。表には百二十円の飲食代の数字があった。土井源造なる男は、民知新聞の「編集者・記者募集」の広告を見て応募しにきたと言った。

土井源造は、くたびれた洋服を着ていた。

その日、酒屋の経営者として家にいた鐘崎義介は、この男を座敷に通して面接した。書院造りの十二畳で、八間床(はっけんどこ)がある。床には飴色(あめいろ)になった南画の双幅がかかり、有田焼の大きな花瓶が置いてある。くすんで、暗い部屋の中ではこの花瓶の赤絵だけが神秘な色彩になっていた。横手に中庭があって松が生え、向こう側の酒蔵の白壁に対する。土井源造はこの変わった「新聞社」を見ても動じる気配はなかった。というのは、彼自身が、着ている背広だけでなく、人物の感じが古色蒼然としていて、溌剌(はつらつ)としたところが少しもない。まだ若いのに頭には白髪が混じり、皮膚は銅色で、眼も鼻も大きく、唇が厚い。正座して微動もしないところは、もの固い性格のようだが活動的には見えない。ものの言い方も、ぽつりぽつりと、低い声で吐き出すような調子であった。

履歴(りれき)を訊くと、東京の私大を出て二、三の商事会社を転々とした。小さな雑誌社の営業部員を

したことはあるが、編集の経験はなかった。文章を書いたこともない。しかし、見真似で、編集の要領はわかっているつもりだ、と土井源造は単調な声で言った。

鐘崎義介は、土井を一目見て、これでは使いものにならぬと思ったが、目下のところ人手がないので、とにかく一カ月の試用ということにした。編集も記者も現在は二人しかいない。それも二十二、三歳の若い者で、中学校しか出ていないので、すべての仕事がとんちんかんである。記者は少し面倒な内容だと歯が立たず、無理すると間違ったことしか書かぬ。二人とも文章が下手で、誤字や当て字だらけだった。鐘崎義介がいちいち書き直さなければならないので、手がかかって仕方がない。眼油断が少しもできない。忙しい時間がよけいに忙しかった。

それに取材の不徹底から精彩のある紙面ができなかった。突込みが足りないから、鐘崎義介には不満だらけだった。実は、主流派の《敵方》が、鐘崎義介の握った材料を民知新聞に出さないのは何かの意図だとカンぐっている中には、こうした取材不足もあったのである。

当市にどういう理由で来たのか、と鐘崎義介は土井源造に聞いた。

東京での仕事が思わしくなく、借金もできたので、女房の生家のある隣県の田舎に落ちのびたが、自分には百姓仕事もできず、いつまでも厄介になってもいられないので、仕事を見つけにこの土地に来た、と正直に言った。要するに食い詰め者である。しかし、土井源造には卑屈な様子は少しもなく、泰然としていた。

鐘崎義介は、試用期間は日給だと言った。計算の細かい男である。もし、本採用になれば初任給の月給はこれだけ出そうと言った。非常に安い。もっとも、君の働き具合をみてさらに昇給を

決めると言い添えるのを忘れなかった。土井源造はそれでもいい、と承諾した。

いまどこに泊まっているのかと鐘崎義介が訊くと、昔の木賃宿と同じ程度の安宿だと言った。本採用になったら、どこか適当な下宿を世話しよう、給料も昇り、生活安定のメドがついたら奥さんや子供さんをこっちに呼びよせるがいい、と親切心で言うと、土井源造は、そのつもりでいます、とすでにそれが決まった事実と心得たような表情で答えた。

こうして土井源造は、民知新聞社で採用となった。

2

土井源造の社員試用期間が過ぎて、本採用となってから半年経った。

鐘崎義介が見るに、土井は口下手で無器用者で、およそ新聞記者とか編集者とかにはむきそうにない。が、実直に、こつこつと働く。まるで自分の欠点を補うかのように努力する。義介が取材を命じると忠犬のようにとび出してゆき、ときには夜おそく民知新聞社と同居する酒造会社の表戸をたたいて戻る。取材先を何軒回らしても、いやな顔をしない。

取材の要領も鐘崎義介が教えたのだが、それを教科書のように忠実に守る。だから融通のきかないことおびただしい。むしろ愚鈍である。

紙面の割付けは、いつまで経っても要領をおぼえない。活字の号数とか計算とかができないので、みっともない見出しができたり、行(ぎょう)が足りなかったり、あまったりする。ほかの人間が一時

間ぐらいですませるところを三時間もかかって、なお印刷所から文句が出る。

見出しの文句は、誰にとっても容易ではないが、土井源造には、難中の難で、考え出すのに四苦八苦し、一つの見出しにも脂汗を流している。そのうえでできたのが、大時代な表現か、何を言っているのかさっぱりわからない文句か、内容とはおよそ見当違いのものか、無難だが平凡きわまるものかになってしまう。

記事にいたっては、だらだらと長いばかりで少しもしまらない。陳腐な用語が多く、さっぱり面白くない。

鐘崎義介は、ずいぶんとサンプルを書いてみせてやったけれど、源造はもともとそのほうの才能がない男らしく、少しもよくならなかった。

鐘崎義介はじりじりして、腹が立つと、

「何をいつまでもぼやぼやしているのか。これが日刊だったら、毎日休刊だぞ」

と怒鳴りつけたり、

「いつになったら記事や見出しが満足に書けるのだ。この文章は何だ」

と大声で叱ったりするが、土井源造は少しも動ずることなく、眼だけぱちぱちさせてうなずいていた。どんなに叱っても憤るということはなく、恥入って恐縮するということもなかった。三十四歳といえばいい年齢で、しかも小肥りで格幅も悪くないから、怒鳴りながらも義介のほうで気の毒になることもある。

考えてみると、取材、原稿書き、整理という仕事をひとりでやらせ、ときには広告取りに回ら

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com